

堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

大夫堀に名を残す堀川開削の立役者 福島正則

納屋橋欄干の家紋 国内唯一の銅像

福島左衛門大夫正則は、堀川開削の時期（慶長15年〈1610〉）には安芸・備後（現：広島県）49万8千石の太守であり、毛利輝元が完成させて関ヶ原の合戦後に明け渡した広島城の主であった。関ヶ原の戦いに勝利した家康軍の論功行賞であり、それまで治めていた清須城から西国・毛利対策含みの移封といわれる。秀吉の甥秀次に替わる清須城主への着任とは様相は違っていた。

名古屋城築城と堀川開削の労役にかんする福島正則の態度には、戦乱収束の念から家康軍に参加した武辺者の心のあやが見てとれる。それが有名な清正とのやりとりにうかがえる。家康側の記録によれば次のようだ。

正則は池田輝政に向かい「近年江戸・駿河両城の経営ありて、諸大名みなこのために疲弊せり。されどいづれも天下府城の事なれば、誰も勞せりともおぼえざるなり。この名古屋は末々の公達の居城なるを、これまで我らに營築せしめらるるはあまりの事なり。御辺は幸、大御所の御ちなみもあれば、諸人の為はこの旨言上せられよ」といった。輝政は何とも答えなかったが、加藤清正は大いに怒り正則に向かい、「御辺は軽率な事を言われるものだ、経営をいとわるるならば、人に議するまでもなし。はやく自国に馳せかえり兵を起さるべし。さる事も成りがたくば台命に違いて要なきことを言いなさるな」と戒め、正則も面を赤めて居たとのこと。（『東照宮御実紀付録』巻12）



福島家紋の中貫十文字
奥には鳥久（旧：得月楼）



福島正則銅像

福島正則は尾張名古屋に縁が深い。御普請総奉行となって開削したと伝えられている白鳥地区の堀川が当初大夫堀と呼ばれたのは、彼の官位を示す通称名「左衛門大夫」からきている。また清須城主時代（文禄4年1595～慶長5年1600）に造った三つの米蔵が、納屋橋東岸に移され、三蔵の地名になっている。現在、納屋橋の中央バルコニーには福島家紋の中貫十文字が鑄込まれており、2018年に納屋橋東南のゆめ広場に銅像が建てられた。

賤ヶ岳で七本鎗筆頭の活躍 関ヶ原の武功も悲劇へ

福島正則は永禄4年（1561）海東郡二ツ寺村（現：あま市）に生まれた。幼名は市松、母は秀吉の母大政所の妹といわれている。秀吉との縁戚関係で小姓になり、天正6年（1578）播磨三木城攻めで福島市松正則として初陣を飾り、天正11年信長の後継を争う賤ヶ岳の戦いでは、賤ヶ岳七本鎗筆頭の活躍をした。

関ヶ原の合戦には家康軍につき、宇喜多秀家軍を破る武功を上げ、24万石の清須城主から広島城主となる。大坂冬の陣・夏の陣（慶長19～20年）には江戸に留められ参戦していない。元和2年（1616）に広島への帰国を許される。

翌年、広島城が夏の洪水で破損し幕府に修築願いを出す。勝手な修築の咎により元和5年に領国を没収され、越後魚沼郡と信州川中島高井野藩の4万5千石に移封後、嫡男忠勝に家督を譲り出家して高斎と号した。配所にあつて5年の寛永元年（1624）に没した。

ただ武辺の大名に非ず

福島正則には「武勇に長けるが智謀に乏しい猪武者」といった印象がつかまう。だが伊予時代の領国統治で年貢負担を村の指出帳のままに認め、広島城主時代にも検地結果を農民に公開し年貢米負担の公正を期すなど、領国の安寧と生産活動の活性化に意を尽くしている。

福尾・藤本著『福島正則 最後の戦国武将』は、「信ずべき史料によるかぎり、正則という人物は確かに豊臣恩顧の武辺の大名であつて、秀吉の天下統一を助け、後には徳川家康に仕えたが、……旧誼を忘れず義理・人情に厚く、時世におもねらず、旧来の秩序遵守を旨として、その身に起こったことを聊かも恥じない不器用な武士であつた」との評価を示している。



長野県高山村・高井寺の福島正則住居跡（県指定史跡）



福島正則生誕地（あま市二ツ寺屋敷）